同人誌万歳！

岩崎　裕

いつの日か我もめされむされどわが生き証は誰がしらめやも

まずは簡単に、私の九十五年の歴史を振り返ってみたい。

私が生まれたのは大正十五年十一月二十八日。あと一週間遅れれば昭和生まれだった。大正十五年十二月二十五日に天皇が葉山御用邸において四十八歳で崩御された。

物価は、天丼が六十銭、カレー十銭、珈琲十銭。サラリーマンの初任給は早慶出で八十円くらいであった。

出生地は沖縄の那覇市。父が台南製糖の取締役として、本土から沖縄に赴任していた。私は次男、三つ離れた兄がいる。私が早稲田、兄が慶應で、家の中で早慶戦をするようになるとはこの頃は母も想像すらしなかったであろう。那覇市の広大な家で八歳まで育った。家には女中がいてその中でもカナが、私をとても可愛がってくれた。今でもアンダギーを食べると懐かしく思い出す。

「ゴロコンや、こーみそーれー」

おんぶされている背中で聴いた物売りの声。「魚を買ってください」そう言っていたのだ。

私が通い始めたのは宣教師が開いた愛泉幼稚園。家から歩いていくと、サトウキビ、甘藷の畑があり、その中に木造の園舎があった。そこで歌った讃美歌を私は今でも口ずさむ。

「聖の御子はあれましぬ　聖の御子は生まれたまいし　聖の御子はあれましぬ」

クリスマスの時に歌った讃美歌だ。私が後に英語の世界で生きていくことになった原点はここにあったのかもしれない。クリスマスの劇で、私のセリフは

「And we are going to go as far as New York from now on」

この一言だったからよく覚えている。昭和六年頃の話である。

小学校に上がった私は、「やまとんちゅう」と言って地元の子供にいじめられたことがあった。「本土の人間」という意味だ。地元の人には、沖縄を踏み台にして内地の人間が上に立っている……そのように受け取られていたようだ。

沖縄の家での父の印象的な姿がある。昭和八年八月の朝。新聞を読んでいた父が突然、

「馬鹿な……」と言った。暫くの沈黙の後、

「日本とアメリカが闘うなんて、大人と子供が相撲を取るようなもので、日本はすぐに投げ飛ばされるよ」

そう言って一人憤慨していた。新聞には『日米もし戦かわば……』と書かれていた。間もなくして、父は会社の株主総会で一人上京した。

「安田源右衛門」を検索すると「日本の経営者」として出てくる。

《大正・昭和期の経営者。台南製糖取締役、沖縄軌道代表取締役。生年　明治十九（一八八六）年十月。没年　昭和八（一九三三）年九月二八日。学歴　東京高商（現・一橋大学）卒。経歴　日本郵船に入社。大正七年台南製糖に転じ、工場長兼主事、昭和二年取締役。沖縄軌道代表取締役なども務めた。》（コトバンク）

廊下の電話が鳴ったのは、父が上京してから何日経った頃だろうか。急病で入院したという知らせで、私達はすぐに上京することになった。沖縄から神戸まで船で三日。神戸から東京まで電車で二日。そんな交通事情の頃の事である。

父はそのまま亡くなった。四十八歳の若さで。

それを機に私たち家族は沖縄から東京へ生活の場を移すことになる。上京した私達を、東京の母親の実家が温かく迎えてくれた。

母方の祖父・岩崎次一郎は、桜田門外の変【安政七年三月三日（一八六〇年三月二四日）に江戸城桜田門外（現在の東京都千代田区霞が関）で水戸藩からの脱藩者一七名と薩摩藩士一名が彦根藩の行列を襲撃、大老・井伊直弼を暗殺した事件】が起きた年に生まれた。

富山の薬売りだったが、明治になって漢方医学の廃止とともに富山売薬が苦境に立たされた時期があったからか、祖父は上京して『岩崎洋品店』を愛宕神社の下に開いた。東京での生活が始まって、私が一番驚いたのは、雪が降ることだった。西桜小学校に通うことになり、二年生の冬、生まれて初めて雪を見た。

愛宕神社の出世の階段を下り、道路を渡った所に『岩崎洋品店』はあった。

私は最近その場所を訪れ、変わり様に驚いた。まるで浦島太郎になった気分であった。「岩崎洋品店」のあった場所は、外車のディーラーになっていた。『岩崎洋品店』の何軒か先に『永谷園』があったのをよく覚えている。まだ小さなお茶屋さんだった頃の……。

父の会社は沖縄にあったけれど、東京にもよく来ていて『岩崎洋品店』で父が母を見染めて結婚に至ったと聴いている。そして兄と私が生まれ……人生とは実に不思議だと思う。

三年生の時、飯倉片町交差点の近くの麻布小学校に転校した。住まいは我善坊町にな

り近くの狸穴町には確か島崎藤村が住んでいた。ここに住んでいた時の印象的な出来事の一つに「二・二六事件」がある。転校して初めての冬、雪が積もる道路に汚わい桶（トイレで出る汚物を入れる桶）が積んである光景が私の記憶に残っている。その日学校は休みになった。

中学、高校は赤坂にあった日大三中、三高に通った。

昭和四年に創立されたが、教育環境の変化にともない、昭和五十一年四月町田市に移転した。開校当初から硬式野球部の強化に努めて戦前以来全国レベルの力を保持する名門野球部の構築にも大きく貢献した。私の同級生でバッテリーを組んでいたピッチャーの津川君は戦死してしまった。卒業したら東工大に通うはずだった。キャッチャーの夫馬君は一昨年亡くなった。

学校のそばに花街があり、三味線を聴きながら通学していた。今でも「ぺんぺん」という三味線の音色を思い出す。

《赤坂花柳界の歴史　　かつて赤坂には「溜池」（ためいけ）という大きな池が存在し、その周辺に各藩の大名屋敷が混在していた。溜池は当時、風光明媚でホタルが飛び交う場所として知られていた。それに随時して茶店がつくられ、のちに岡場所（江戸時代の非公認の花街遊郭）が形成される。しかし、芸妓の置く花街として機能するのは明治以降である。主に、軍人、政治家が利用し最盛期には芸妓四百名、特に萬龍（まんりゅう）という芸妓が売れっ子として名を知られ、彼女の写真が完売になるほどである》

（花街の紹介・東京花柳界情報舎）

高校生になった頃、田園調布へ引っ越した。結婚して等々力に引っ越すまで、私はそこで生活したのだが、その間、戦争で徴兵され、終戦後は早稲田大学に通い……私の人生のとても濃い部分になった。戦争の頃の話は、私が早稲田の同人誌『狂想』に寄稿したものを後で読んでもらいたい。

早稲田大学の卒論で一位になったことは、長い人生の中でもとても嬉しいことだった。オスカーワイルドの『ドリアングレイの肖像』を題材にして書いたものだが、題名は残念ながら忘れてしまったし原稿も無くしてしまった。でも、とても驚かれた覚えがある。その頃まだ私の名字は安田で、「えーあの安田が？　嘘だろ……」そんな声も聞こえて来た。それくらい私はその頃、凡人であった。

朝鮮戦争の頃、私は通訳として小松製作所で働いていた。日立製作所でも通訳をしていてその時出会った女性と結婚した。

外資系の保険会社で働いている時、キャッスルと言う社長にはしごかれた覚えがある。紆余曲折を経て私は三十五歳の時、外国語専門学校を設立した。

学校を創るにあたっては、父と一緒に働いていた日本銀行の末廣幸次郎氏にお世話になった。

学校は時代の波に乗り、順調だった。神田外語学院と競うくらいの時期もあった。教え子の中には芸能人もいたのを記憶している。なかでも岩崎宏美さんは名前が似ていることで、仲良くなった。とても頭のいい子だった。今でもテレビで活躍している姿を観て、嬉しく思っている。

校長室で泥棒と語り合ったことも、いい思い出だ……

学校を乗っ取られそうになった時、銀座のクラブのママさんの情報力で助けられた。

軽井沢での夏季学校も盛況で楽しかった。

アメリカの学校へ留学生を連れて行き、自らも学んだ。

色々あったが、今は楽しかった事ばかりを思い出す。

ちょうど半世紀、私は学校長として現役だった。東日本大震災があった年、八十五歳で学校を閉めた。その時の私のスピーチを聴いていた戸田建設（学校の建物を建てた）の人が、文章を書いてくれたのを最近見つけ、今のコロナ禍にも通用するような文章だと感じたので紹介したい。

《破壊と生成　～意思の力～岩崎　裕（ひろし）八十五歳。

早稲田大学を卒業後、戦後ＧＨＱの通訳として活動する。

その後、五反田の地に英語教育専門学校を立ち上げる。

以降、その学校を拠点に英語教育に身を捧げる。

彼が築き上げてきた、五十年以上続いたその学校がこのたび閉校することになった。

昨日、その功績を湛えたパーティーが開かれた。

それはいみじくも、この国難に重なってしまった。

国際的社会貢献に大きく目を広げている彼らしく、そのパーティーは、急きょ今回の被災地に向けてのチャリティー・パーティーへと変更された。

昨日私は、そのパーティーに出席した。

八十五歳とは思えぬ朗々とした声で、彼のスピーチに聞き入った。

最初は日本語でお話しされていましたが、それがどうももどかしくなったようで、途中から、英語になってしまった。

八十五歳と言えば、人生の中で、自分の意志ではどうにもならないような困難に幾度も遭遇している。特に戦中・戦後の中、破壊の極みの中で翻弄されてきたお話しについては、胸を熱くさせられた。

人が生きるということは、生きている限り破壊のリスクにエクスポーズされていると

いうことである。生きるためがゆえに、人為的であれ、自然に対してであれ、そのリスクから逃れることはできない。思えば、人類の歴史とは、その破壊と生成の繰り返しの上に成り立っていることを痛感させられる。人類だけではない。生きとし生けるもの全ての上に、その脅威は襲いかかる。

発生からまだ間もない人類などは、その脅威の前においてはひとたまりもないものである。

我々の視点からすれば、それは災害であり、脅威であるが、宇宙や地球の視点にとっては、自らを正常に保つための正常な現象なのである。

我々の視点からすれば、破壊ではあるが、それは生成（再生）するための意思は、必ずや私たちの中に備わっているはずである。

いつの日にか、どんな形でかは知れずとも、破壊はまた起こる。

しかしどんな破壊に遭おうとも、私たちの中の生きようとする意志は枯渇することはない。人はその意思を捨て去ることはできない。そしてどんなに時間がかかろうとも、どんな辛い思いをさせられても、その意思はいつか動員される。

それは、あまりにもぜい弱に創られてしまった人類に与えられた特別な能力だと信じたい。

未来は実存しない。

あるのは現在と過去だけである。

未来は、そうなった瞬間に現在へと置換されてしまう。

であるならば、先のことを極端に危惧して生きるよりも、今を精一杯生きることが合理的なことなのだ。

WILL とは未来のことを表現する助動詞でもあるが、意思を表す名詞としてや、困難を打開するための動詞としても使われる。今こそわたしたちの中の〝意志の WILL〟を呼び起こすべきである。

Where there's a will, there's the way.

この閉校に伴って、場所が変わろうとも、またその地に校舎がなくなろうとも、岩崎裕の意志は健在であった。》

現役を引退して十年の月日がながれたが、私は今でも毎朝ワイシャツを着て、ネクタイを締める。家内は二十年前に亡くなってしまい一人暮らしだが、住み慣れた我が家で最期まで暮らしたいと思っている。

ここからは、私が早稲田の同人誌『狂想』に、寄稿したものである。（二十年位前）に。

敢えてそのまま紹介したい。

『戦中の思い出「塞翁が馬」より』

馬年の平成二年にわれ思う人生ばんじ塞翁が馬

今から五年ほど前、自分の心境をこう年賀状に書いて、友人知人に送った事がある。

塞翁が馬は中国からの逸話で、その話はこうである。昔、塞翁が若かった時、飼っていた馬が逃げて、彼はがっかりした。ところが数年たって、逃げた馬が、数頭の子馬を引き連れて帰って来た。彼は喜んだ。それからと言うものは、子馬の育成にひびを送った。やがて彼の子供が、その内の一頭に乗るようになった。すると或る日、子供が運悪く落馬して大怪我をした。しかもその怪我がもとで、子供は片輪になった。彼は悲しんだ。そしてこれらの馬が、帰って来なかったら、こんな事にはならなかったのにと悔み、馬の群れを憎んだ。ところが運命とは皮肉なもので、子供が青年に達した時、その国に戦争が起きた。ほとんどの若者は兵隊にとられて戦死したが、彼の息子だけは片輪のため徴兵を免れ、幸福な一生をおくった、と言うのだ。だから人間の運命は定まっていないのだから、幸福になったからと言って喜ぶ事もなく、不幸だからと言って悲しむ事もないと言うのだ。言いかえれば、仏教の言う様に、この世の一切は無常と言う事である。それが頭で分かっていても、世の中の現象に振り回され、身近に起きた事柄に一喜一憂するのが凡人のかなしさである。ところで、塞翁が馬の逸話は、そのまま私の過去でもあった。というのは、少年時代から結核を煩い、腺病質のまま思春期を迎えた私は、肋膜炎、肺浸潤を数回繰返した為、旧制中学校四年の時には、ついに一年間の休学を余儀なくされる破目になった。たとえ病気とは言え、学年を一年おくらすと言う事は、競争心が旺盛な歳だけに、私にとってはまことに辛く耐え難いことであった。

その反面、文学少年だった私に、多くの読書の機会を与え、詩を書かせ、短歌創作に意欲を持たせたのは、この病気療養の期間だったのだ。それだけに、今から考えれば、精神的に充実した期間であり、人間形成に有意義な時代でもあったのだが、そこは若さの哀しさ、人生とは長い旅路なのだから焦る必要はないと諭されながらも、心はすぐ現実の世界に戻り、実社会の競争から脱落するのではないか、と深く恐れた。それはあたかも、心のどこかで、西行の隠遁生活に憧れながら、一方ではそれを否定する様な、ロマンティシズムとリアリズムが交錯する不安の状態の中で、心はいつも揺れ動いていた。昭和十九年、戦争は激化の一路を辿っていた。その頃は、私も中学を卒業し、上の学校に在学していた。だがその時の日本は、もう敗戦の色が濃厚で、勉強どころではなかった。それどころか、病身の私にまで、徴兵のお呼びが掛かろうとしていた。

と言うのは、私ですら徴兵検査の結果が第三乙種合格で、病気療養中であろうとなか

ろうと、その人間が片輪でない限り、誰でも戦争に駆り出されると言う末期的状態になっていた。我は覚悟した。だが覚悟したと言っても当時の私はまだ数えで十九才、この世に生を受けて十八年と数ヶ月、将来に対する夢や未知への憧れは数多くあった。たとえば自分の処女歌集を出したいとか、小説を書きたいとか、もう少し勉強して外国文学の翻訳や文芸評論を書きたいとか。それらが今世で果たせぬまますべてが終わるかと思うと、自然と涙がこみ上げて、娑婆への未練に心が乱れた。「いつの日か我も召されむされどわが生き証は誰が知らめやも」私は涙を押さえてこう日記に書くと、これを自分の辞世にしたいと思った。その頃は、「打ちてし止まむ」とか「大君の辺にこそ死なめ、かえりみはせじ」の時代だっただけに、これは女女しすぎると思ったが、その様なことは、もうどうでもよかった。ただ自分を偽らずに、真実を吐露することが、自分の魂の救いになる様な気がしたのは事実である。それから数ヶ月して、ついに私の手許に一通の入隊通知が届いた。入隊先は長野県松本市の歩兵連隊であった。人生は小説より奇なりと言うが、まさにその通りであると思う。と言うのは、驚くべきハプニングが私を待ちうけていた。入隊の初日、新兵に対してもう一度レントゲン照査の身体検査が行われ、一人ずつ軍医の前に呼ばれた。間もなく自分の名前も呼ばれ、私は「はいッ」と大声で返事をして、ある軍医中尉の前に直立した。と、どうであろう。その軍医は誰あろう、私の係つけの町医者矢島医師ではないか。私は自分の目を疑った。一瞬どうして、この人が、こゝに?と思ったが、それは相手も同様であったに違いない。暫く驚きで声も出なかったが、「それにしても、軍隊に君の様な者までがねェ……」とまだ信じられない表情で私を見つめていた顔が、今でも印象的である。その晩、私は将校に呼び出され、即日除隊になった。私と矢島医師との因縁と言い、人生とは最後の最後まで分からないものである。

『とっておきの話』

昨年「狂想」十三号で、私は戦中の思い出を一つ書いた。今回もまたそのシリーズのひとつとして、どうしても書き残したいこと、いや正直言って、出来るだけ多くの人に聞いてもらいたい話として、あえてこゝにそれを記述したいと思う。

昨年は終戦五十周年で、いろいろな行事があった。私は偶然にも、英語圏の外国人達や日本の英語関係者達を前にして、この話を英語で語る機会があった。スピーチのタイトルは、ウト・ア・ブレイヴ・マン・ルテナント・タムラ「何んと言う勇者・田村中尉」であった。話終わった時、傾聴者の中からどよめきがあった。そして閉会後、「ナイス・

スピーチ・サンキュー」と言って、握手を求める幾人もの外国人が跡を絶たなかった。私はこの話をしてよかったと、しみじみ思った。話は今から五十二年前に遡る。その頃、日本の戦況は風雲急を告げ、初の学徒出陣が決まった年である。我々は旧制中学の最終学年で、軍事工場に派遣されたまま、勤労奉仕に明け暮れていた。それでも週に、一回は登校日があり、学校で軍事教練だけがあった事を覚えている。そんなある日、登校日の朝礼時、陸軍省から派遣された新しい配属将校が我々の前に現れた。朝礼台に立って、挙手の礼をした彼は、軍服のせいか、陸軍中尉の肩章が凛々しく眩しく見えた。我々は軍服の威圧感に暫く緊張の面持ちであったが、新任の配属将校を紹介する校長の口から、その略歴を聞くうちに、徐々にほっとした安堵感が湧いてくるのを覚えていた。それは、彼が純粋の職業軍人ではなかったからだ。名前は田村で、軍隊以前は、早稲田大学の文学部で英文学を学び、卒業後は、英語教員として、青森の女学校に奉職していたと言う。恐らく軍隊にとられてから、幹部候補生を志願し、将校に任官したのであろう。しかしこの女学校と言う語が、校長の口から洩れた時、思わず内心笑みがこみ上げてきた。と言うのは、今まで軍事教官とは、余りにも異色な経歴だからである。それに、その頃は男女七歳にして席を同じゅうせずの世の中で、男子は男子校に、女子は女子校に通う時代であった。だから女学校とは、男子にとって、覗くことの出来ない世界であった。それだけに、女学校と言う語には、好奇心をくすぐる官能的な響きがあった。その禁断の園の様な女学校を教えていた彼――私はこの時、昭和十二・三年頃書かれた石坂洋次郎の「若い人」を思い出していた。女学校に赴任したばかりの、若い男性教師の悩みを書いた小説であった。「彼もまた若い人か……」と再び笑みがこみ上げてきた時、ふと私の頭を掠めたのは、軍国主義に徹した厳しい軍人のイメージからはほど遠い、自由で明るいヒューマニストとしての彼の人間像であった。この印象は正しかった。それから数か月のことである。田村教官引率のもと、学校から代々木の練兵場まで、銃を担って行軍した事があった。教官は、その日に限って、いつになく厳しい顔付をしていた。その表情は、行軍中も変わりなかった。途中、町中ですれ違う兵隊達の敬礼にも無表情で答え、たえず何かを深く考えている様子であった。その時教官が何を考えていたか、すべては後で分かるのだが、当時の思想弾圧の中で、軍国主義に洗脳された若者を如何に目覚めさせ、正しい方向に歩ませるか、心はその事で激しく揺れ動いていたに違いなかったと想像する。その内面的な動揺は、まず彼の行動に現れた。練兵場に着くと、突然廻れ右をし、そのまゝ学校に向けて、再び行軍と言う指令を彼は下した。「前へ進め！」我々の当惑におかまいなく、彼は足早に先頭に立った。こゝで小休止があると思っていただけに、肩に傳わる銃の重みが急に二倍に感じられ帰路の行軍はつらいものとなった。

学校に着くと、皆くたくたになって、銃を抱えたまま校庭にしゃがみこんだ。数分して、集合の号令がかかった。しかし疲労困憊の我々は、銃にすがりついても、なかなか立ち上がれず、整列するのに時間がかかった。この場合、普通の教官なら、一人一人にびんたを食わすのが常套である。ところが、どうであろう。怖怖あけた我々の目に映ったのは、微笑を湛えた教官の姿ではないか。彼は我々をまわりに近寄せると、こう話し始めた。

「君たちも承知の様に、徴兵年齢が下がってきた。間もなく君たちも戦争に行くだろう。だが命は惜しめよ。一旦この世に生を受けた以上、命がどういう意味を持つか、君達は考えた事があるだろうか。特攻隊を志願して、敵と刺し違えるのが若者の名誉だとされている様だが、はたしてそうだろうか。この戦争は必ず終わる時が来る。その時、この荒廃した日本を再建するのは、誰だと思う。生き残った僅かの大人では無い。生き残った君たち大勢の若い力だ。若い君達の活力こそが、戦後の日本に、一番求められているものなのだ。だから今君達が軽挙妄動して命を落とすことは、将来の日本にとって、いや世界全体にとって、どれだけ大きな損失になるか、君達に分かるだろうか」教官の声は熱を帯びていた。みんな狐につままれた様に、話の中に吸い込れて行った。……あれから、もう五十年以上がたつ。当時の仲間で、戦死したのは僅か一名だけ、みな無事に復員して現在に至っている。陸軍省の配属将校で、軍国主義の看板を掲げねばならなかった教官が「君死に給うこと勿れ」と我々を諭した勇気ある発言は、素晴らしいメッセージとして、永遠に忘れられないだろう。と同時に、いま日本がこの様にあるのも、かかる無名の礎石があったらこそ思うのは、わたしだけの感傷であろうか。

『助からぬまま助かる　―仏教的視点から―　』

アメリカのワシントンＤＣに来ると、市内を流れるポトマック川の湖畔に佇んで、ここで十年程前に起きた飛行機事故のことを思いだす。それは、離陸した飛行機が突然失速して、凍った雪のポトマックリバーに着水してしまったときの出来事である。私は現場に居合わせたわけではなかったが、その模様をあとでテレビのニュースで知って、ひどく驚いたことを覚えている。なかでも私の心に大きな衝撃を与えたのは、その事故機に乗っていた或る初老の紳士の行動であった。

彼が気がついた時、つめたい水の中に投げ出されていた。そこに救助に来たヘリコプターが、空中からロープを降ろして、彼を助けようとした。だがその時、もう一人の乗客の姿が、ちらっと彼の目に入った。それは若い女性で、必死になって助けを求めていた。すると彼はヘリコプターに向って合図し、彼女の救助を先にするように叫んだ。へ

リコプターは一瞬躊躇したが、その娘を水面から吊り上げると、すぐに飛び去った。それから間もなくヘリコプターは戻って来たが、その時もはや彼の姿は水中に没して、影も形もそこにはなかった。彼が水面からヘリコプターに合図した時、「私は、もうこの年だ。あの子はまだ若い。これからの人生だ。私より彼女のほうを先にしてくれ」と叫んだと言う。この事は美談として大統領の耳にもはいり、最高の紳士道だと大統領が賛美したことは、今でも私の記憶に新しい。

そこで、これと対照的に思い出すのが、芥川龍之介の短編「蜘蛛の糸」である。その中にカンダタという無頼漢が出て来る。そのカンダタは死んで地獄に行く。しかしこんな悪人でも、一つだけよい事をした。それは子供の時に蜘蛛を助けたことである。そこで如来は極楽の蓮の池の底に見える地獄に、蜘蛛の糸を垂らすよう蜘蛛に命じる。やがてその糸が垂れて来たのを見たカンダタは、喜んでそれに捉まり、地獄を脱出しようとする。それからひたすらその糸を攀じ登り、かなり登ったと思う所で下を見ると、どうであろう。他の地獄の亡者達が大勢それに捉まって、いっせいに攀じ登って来るではないか。一人の重さでも切れそうな糸を、こんな大勢の亡者達が捉まるとは言語道断だと怒り、「この糸はおれのものだ。みんな下りろ」と大声で怒鳴った。その途端、カンダタのぶら下がった糸は、彼の所からぷっつり切れて、彼はもとの地獄へまっさかさまに落ちていく。これがこの物語のあらましである。

飛行機事故の美談とは、まさに対照的な話ではないか。私がその紳士の行動を初めて聞いた時、その自己犠牲の偉大さ、美しさに、思はず脱帽した。もし私がこの事故機の渦中にあったら、どうであろう。まず脳裏をかすめるのは、家族の顔である。そして一刻も早く危機から脱出して、無事生還したいという気持ちが一杯で、他を省みる余裕など、正直言って全くないであろう。ただここで論じたいのは、どのような行動が立派で、どのような行動が立派でない、ということではない。自己犠牲の美談は美談として、人々の思い出に残るであろう。だが、「人はよく、気に入った自分自身を頭で描き、それに恋してしまう。これは危険なことです」と英国の作家A・ウエスカーは言っているが、私もそのことには同感で、現実の人間の実体は、むしろ芥川龍之介の「蜘蛛の糸」の中にある様に思はれるが、どうであろうか。なぜなら事故の場合、我れ先を争って脱出し、無事救出されたいと願うのが人間であるからである。「これはおれの糸だ。みんな下りろ」と叫んだカンダタは、まさに人間の本性を露わにしたもので、叫んだ途端まっさかさまに地獄に落ちるところに、芥川龍之介自身の人生観、人間観が窺がえるのではなかろうか。即ち人間とはそのようなエゴイズムで固まったもの、自分さえよければ他はどうでもよいと考えるもの、だから「地獄ぞ一定すみかぞかし」と言う親鸞聖人の

御言葉通り、人間は地獄に生きる存在なのであらう。

日本に帰ってから、私はその様な内面が、私の中にもあることに気がついた。それは家の近くを、散策していたときのことである。ちょうどある家の塀沿いに町角を曲がろうとした時、出合いがしらに、犬をつれた十代の少女が、自転車で私の横をすり抜けていった。自転車はかなりのスピードであった。私はあわてて道路わきの電柱に身をさけて、通り過ぎた自転車の後を見送った。少女の連れた犬は大きく、ボクサーのような猛犬に見えた。

もしあの時、タイミングが悪かったら、恐らく自転車にぶつかっていただろうし、そのはずみで猛犬にも噛まれていたかも知れないと思うと、思はず鳥肌が立った。その途端、損害を受けた場合のことを考えて、その少女の住所や名前を書くペンや手帳があるだろうかと、自分のポケットに手をやった。なければその際は、その少女の親の所に一緒に行くべきだ、などと無意識のうちに考えていた自分に、私は急に恥ずかしくなった。

アメリカでは、第三者賠償という意識が社会の中にある。買い物に来た客が、入口近くに捨ててあったバナナの皮で滑り、怪我をした客から店主が賠償を求められたケースが、実際にアメリカであった。一寸した事故でも、すぐ人の所為にし、賠償を求める。そこには、平和も人類愛の欠片もない。あるのは、自分だけは損をすまいと言うエゴだけである。これを生き地獄と言うのであろうか。それに馴らされていた私自身も、地獄にいたのだ。そのことにも気づかれずに自分だけはそのようなことをしないと言う善人意識が、そもそも地獄への道なのだ。と同時に、自分は罪悪深重にしてとても助からぬ身と知ることが、機の深信と言うことであろうかと思う。深信にはもう一つの法の深信があると聞かされている。それは四十八願中の第十八願、念仏往生の願である。即ち「我が名号を信ぜんものは、必ず往生を得しめん」である。この事によって、罪悪深重、煩悩　盛の助からぬ身が、阿弥陀如来の願力によって、往生を遂ぐるわけである。助からぬ身が、助からぬまま助かるとは、機の深信、法の深信によるものではなかろうか。またそのことが煩悩を断つことなく涅槃を得るに至る所以でもなからうか。

ある時、私の知人がこんなことを話してくれた。

「私も愚かですねえ。金策で困っている人に、つい同情して金を貸したんですよ。はじめのうちは、約束通りの額を、約束通りの日に、払ってくれたのですが、そのうち滞ってしまいましてね。催促に行くといつも本人は留守。そのうち姿をくらまして行方知れず。探すのに本当に骨折りました。やっと見つけて、強行に談判しましたが、本人はあやまって、ただ首をうなだれるのみ。急を襲ったアパートの六畳間には、小さな子供さんや奥さんもおりましてね、私のやっていることが、空しくなりました。私から逃げま

くっていた相手が、私よりずっと地獄を生きていたかと思うと、民事裁判にもっていこうとしていた気持ちが、いやになりましたよ」

その知人から葉書が来た。その中に、彼の心境を語るものとして、次の短歌が書いてあった。

憤りいつかうすれて人間を悲しむ気持ち我に起きたり

彼は念仏者ではないかもしれないが、人間を悲しむ気持ちが涌いてきたとき、地獄を通して、地獄から浮かび出る何かを感じたのではないか、と思う次第である。

『いろは四十七文字の文化的遺産』

もう５０年ほど前であったろうか。まだ私が早稲田の学生であった頃、美しい平仮名文字の書に出遭って驚いたことがある。それを見たのが美術館であったのか、それとも書の展覧会であったのか、今はっきりとは覚えていない。目に焼きついたのは、華麗な平仮名文字の細い線が縦に流れる短冊の和歌であった。だがその短冊は、ことによると、その頃早稲田大学の教壇に立っておられた曾津八一先生が、書家として、歌人として、自ら書かれたご自身の短歌の一つではなかったかと想像するのだが、たとえそうであったにせよ、またそうでなかったにせよ、その強い印象は今でも脳裏を離れることはない。

ところでこの平仮名文字を歴史的に遡ってみると、それが開花し始めたのは、西暦一〇〇〇年代頃からである。それまで文字世界を独占して来た男性の漢文に対して、源氏物語や枕草子などの女流作家達によって表現された平仮名が急に脚光を浴び、これを機として、華麗な平安朝文化が築かれ始めるのである。この文化的推移を、学生時代に学んだヘーゲルの弁証法で考えて見ると、漢字文化と言うテーゼに対して、平仮名と言う新しい文化がアンチテーゼとして現れ、その結合としてアウフヘーベンされた文字文化が、現在我々が使う日本語の姿であろう。ところがワープロの流行する現代社会では、人が文字を書かずに、機械が文字を選択してくれるせいか、漢字忘れに悩む人々が増えていると聞く。そこで頼りになるのが平仮名である。とくにメモを取る時など、漢字が思い浮かばない時、咄嗟に平仮名に頼れる。それだけに、平仮名の実用性は、忙しい日本人にとって、今や不可欠なものであろう。だがである。私がここで述べたいことは、平仮名の優美性、実用性は、日本人の意識の中にあるものの、その基盤になっている「いろは四十七文字」の成り立ちについて、どれだけの人達がそれに関心を持ち、またその中に含まれている仏教思想に気がついているだろうか、ということである。

確かに「いろは四十七文字」は小学校で国語を学んだ時、日本語のアルファベットと

して覚えさせられた記憶がある。それから後、別に深い意味も知らずに日々その文字を書き、やがてその組み合わせで文章が書ける様になって、気がつくといつの間にか大人になっていた。そう言うわけで、私も四十代を過ぎるまで、「いろは四十七文字」の由来を知らずに来た。それだけに、この件に関しては、私も大きな口を叩ける身ではないのである。ところが五十代にはいって、私も人間の生き方や価値観をネガティブに見る様になり、その答えを仏教に問うようになった。その動機が私に様々な仏典との出遭いを作り、そのひとつとして涅槃経があった。そしてそれを見るうちに読むうちに、その教典の第十三聖行品の渇に…「いろは四十七文字」の内容が出てくるのが分かった。原文は、勿論漢文ではあるが、私はその和訳が「いろは四十七文字」であると分かって、その内容の深さに、思わず驚きと感嘆の声をもらした。それは、小学校時代に日本語のアルファベットとして覚えさせられた「いろは四十七文字」とは、全く違う印象であった。またこの四十七文字の作者が、世間では弘法大師と言う説もあっただけに、私にとっては情報の修正にも繋がり、大きな発見ともなった。だがそれは同時に、五十代になるまで、その事に気付かなかった自分の不勉強さ、無関心さに、思わず恥ずかしくなったのも事実である。

さて、それはともかくとして、この四十七文字を、一字、一字、ここで紐解いてみたいと思うが、どうであろうか。まず「いろはにほへと」から始まる最初の二十三文字を、誰でも理解しやすい様に、次の様に書いてみた。

「色は匂へど　散りぬるを　我が世誰ぞ常ならむ」これを現代風に訳すと、次の様になるだろうか。「誰だって若い時がある。若い時はどの様に美しくても、歳をとれば、みにくくなって、やがて花の様に散る。この世の中に、誰が一生そのまま変らずに、いられようか」

これは言うまでもなく、仏教思想の中核をなす無常観で、方丈記の「ゆく川の流れ」や、平家物語の「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰のことわりをあらはす。」とも共通のものである。

尚このあと、最後の二十四文字が次の様に続く。「有為の奥山今日越えて　浅き夢見じ　酔もせず」有為とは仏教語で、無為の反対、現代風に解釈すれば、弱肉強食の競争に生きる一喜一憂の世界とでも言うのであろうか。しかし注意すべきことは、「有為の奥山今日越えて」は隠遁ではない。身は娑婆世界にあって、心がこの世の箙、煩悩を超えると言うことであって、その点よく誤解されるところである。その次に来る「浅き夢」とは、世の中が自分中心に廻るのではないかと思う儚い期待、それから「酔いもせず」は、そのような妄想に酔いしれることなく、真実をみつめて、と言う意味であろう。此

の最後の二十四文字は、まさに涅槃の境地であり、娑婆世界に身を置いて、しばしば迷いやすい私などにとっては、座右の銘にしたい一節である。だが不思議なことに、この様に人生を深く洞察した「いろは四十七文字」の内容が、なぜか多くの人々に知られていないのである。それは日本の国語教育に問題があるのであろうか。それとも、それをただ単に、英語のアルファベットの様に考え、平仮名の実用化にのみ視点が行ったせいであろうか。いずれにせよ、平仮名の基盤になっている「いろは四十七文字」が、日常の実用性の面だけで考えられているのは、それが日本人の誇れる文化遺産であるだけに、まことに残念なことだと思うのだが、この声は、私のみの口から出た一人のみの嘆きであろうか。

古希過ぎて3年、外国語を求めその異文化を求めて50年、それだけに、日本の誇れる文化遺産が気になる私の今日この頃である。（旧第二早高・文学部英文科卒）

この号で、私の後に載っていた文章も是非読んで欲しいと思う。私はこの文章を久しぶりに読み、『フェノロサと魔女の町』を読んでみたくなり、知人に取り寄せてもらった。その書き出しはこうだった。

入り江の風が、ひととき唸って、止んだ。気まぐれに霧は流れ、海辺の街が、夢幻のように、かいま見えた。

『書き出し』　　伊藤光治

先生といわれるほどのバカでなし

これは誰の作かしらないが、私もものを書くようになってから、いつの間にか先生といわれるようになってしまった。もともと悧功だと思っていない私である。バカにされても腹は立たない。しかしものを書くのはバカでも出来るが、人に読んでもらえるものを書くのは容易なことではない。

久我なつみさんの「フェノロサと魔女の町」が、第五回蓮如賞に選ばれた。蓮如賞は本願寺維持財団が主催し河出書房新社が協力して、優れたノンフィクションに贈る文学賞である。その選考委員をつとめた五木寛之氏が、「この書き出しは米国の作家スティーブン・キングよりおもしろい」と評したという。

久我さんのご両親も文筆家だというが、亡くなったお父さんから「出だしを百回は書き直せ」と教えられ、本当に百回も推敲したことがあるという。文章は書くことよりも読ませることが難しい。何となく自然に読者を引き込んで行く。奇麗に盛り付けられた料理を見て、つい箸がつけたくなるように、文章は書き出しがよいと、ついつい頁をめくらされてしまうものだ。

有名な川端康成氏の「雪国」の書き出しは、「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」であるが、実ははじめ、「国境のトンネルを抜けると、窓外の夜の底が白くなった」というのであった。比べてみると、前者の方が官能的だ。短い文章の中に雪国に入ったという実感を象徴的に描き切っている。

「いづれの御時にか、女御・更衣あまたさぶらひ給ひけるなかに……」とはじまる源氏物語、「祇園精舎の鐘の音、諸行無常の響きあり」と書き出した平家物語、「つれづれなるままに日くらし硯に向かいて……」と序段から流れるように筆を運んだ徒然草、日本文学を代表する古今の名作は、いずれもその出だしで人の心をとらえて離さない。

「山路を登りながら、かう考へた」にはじまる夏目漱石の「草枕」は、最初の数行を諳んじられるほど人口に膾炙されているところだ。はじめよければすべてよしというのではないが、人に読まれるためには、「出だしは百回直せ」は至言である。久我さんはお父さんの諭しを忠実に守り、念願の文学賞を獲得し、落選人生を清算した。

それにしても、いつも推敲もそこそこに駄文をものにして来たわが身を顧みて、バカは私にもっともふさわしい代名詞かもしれない。

そう改めて自覚させられたところだが、この年になってバカはバカなりに安じて生きるほかないと、心に決めた私である。（元・サッポロビール勤務）

私はこれを読み、一人の女性を思い出した。

二〇一九年の一二月、ある講演の帰り際、『ダスビダーニャ、わが樺太』の著者・道下匡子氏と知り合った。

この本で第二次世界大戦終戦後のまだ続いていた樺太での悲惨な状況を、知ることができた。道下匡子氏自身もその時三歳で、生と死が紙一重の中、幸運にも生き延びて、本を出せたことは、使命を果たしたと言えるのではないだろうか。父親の手記がその頃の様子を知らせる大きな役目を果たしている。「あとがきにかえて」を読み、その情熱を感じた。一部引用する。

《民主主義とは、時の権力による不当な政策や不公平な世の中の仕組み、はては形骸化された教育制度の影響をも跳ね返して、個々の人間が、本を読み、考え、祖先の加護と自然の恵みに感謝を忘れず、努力に努力を重ねて、本当の自分を見つけ、その自分を生涯をとおして成長させつづけることだと私は理解しています。そのことをずっとこれまで私は、高校と大学時代を過ごし、はじめての就職をしたアメリカで学んだと思っていたのですが、父の一生のなかにこそ、日本を真に民主的な国にするための最も大切な答えのひとつが、しっかりと根づいていることを知りました。『ダスビダーニャ、わが樺太』

をお読みくださる方々が、眞岡町の惨劇の一端を知るという歴史的な意義と当時に、民主的な社会をつくるためには、まず民主的な自分をつくりあげるための努力をしつづけることが大切であると気づいてくださるなら、父も本望でしょう。私にとってもそれに過ぎる悦びはありません。》

この時の審査員は五木寛之、中沢新一、梅原猛、藤原新也の四氏。

中沢新一氏の選評を紹介したい。

《道下匡子氏の名前は、七〇年代のウーマンリブ運動の渦中の、華々しい活動によって、僕の記憶にまだなまなましい。その彼女が、愛する父親への追憶を強い縦糸にして、終戦時における樺太からの脱出行は、一体、家族と自分にとって何であったのかを問いただす作業にとり組んだ。彼女は、それを行うにあたって、ドキュメンタリー文学の世界で流行の体験主義にも、また事実主義にも落ちこむことなしに、別の可能性を模索してみることにしたのである。》

後日、道下匡子氏から届いたクリスマスカードには、

《コスタリカの強力な平和主義者、弁護士、ロベルト・サラモ氏の講演会の後でお会いしました。皆で力を合わせて日本の宝、日本国憲法を「悪魔の手」から守りましょう。美しい守護天使たちをお送りします。》と書いてあった。

少し脱線してしまったようだが、私の文章が同人誌『狂想』に掲載されていた頃と、『ダスビダーニャ、わが樺太』が発刊されたのは同じ頃だ。

『狂想』第十六号の編集後記が心に沁みる。

《（前略）昨年十月、編集人の岩田敏雄君が喉頭がんで逝去されたので、一時休刊となりました。昭和廿五年創刊以来中心的存在であったが彼の死は痛恨の極みであります。「狂想曲」は鳴き止まずと読者から激励の声援を頂いておりますが「継続は力なり」と再出発することと致しましたのでご声援方、宜しくお願い申し上げます。》

このあと間もなくして『狂想』は終止符をうった。このようにして同人誌がどんどん姿を消していくのだろう……悲しいことだと思う。

私はスマホを持たないし、ガラケーを持ってはいるが、宝の持ち腐れ状態で、もっぱら固定電話派だ。パソコン教室にボケ防止のため暫く通っていたことはあるが、普段の生活では使わない。

多分私は、アナログ人間のままこの世を去ることになるであろう。

しかしながら、私の文章をインターネット媒体で読んでくれる人がいたら……それは

同人誌万歳！

嬉しい。

だからインターネット媒体も積極的に活用して、同人誌を復活させようとする動きに賛同したい。

文学の素晴らしさを知る一人として。